



水痘ワクチン

B-09

どんな病気ですか？

水痘は、水痘帯状疱疹（すいとうたいじょうほうしん）ウイルスに初めて感染することでおこる病気です。発熱と一緒にまばらで盛り上がった発疹が全身にできます。

主な症状

- 発熱は、多くの患者さんで見られます。
- 水痘はまばらで盛り上がった発疹が出てくることで気づかれます。発疹の数は様々ですが、重症なお子さんは皮疹の数が多くなります。皮疹は

1 赤い発疹（紅斑）



2 米粒大の盛り上がった発疹（丘疹）



3 水ぶくれ（水疱）



4 膿を持った発疹（膿疱）



5 かさぶた（痂皮）



の順に変化し、これらの皮疹が混在するのが特徴です。

発疹は、体の全ての場所にできます。特に、髪の毛の生えている頭皮にもできることが特徴です。

皮疹がすべて痂皮化（かさぶた化）するまで7～10日程度かかります。その時点で感染力はなくなります。重症化した場合は抗ウイルス薬による治療があります。

- いったん水痘にかかると、免疫が落ちたときに帯状疱疹（たいじょうほうしん：最初はチクチクした痛みから小さな水ぶくれができて体の片側だけに帯状に広がります）にかかることがあります。

合併症

- 最も頻度の高い合併症は皮膚の細菌感染症です。皮疹の部分が赤くはれ上がってきたら注意が必要です。

ワクチンをいつ、何回接種しますか？

水痘にかかったことのない生後12～36か月未満のお子さんに対し、3か月以上の間隔をあけて2回接種が必要です。

1回目



1歳になったら早めに

2回目



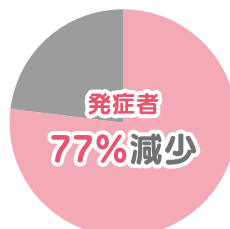
1回目から6～12か月後

また、定期接種の年齢から外れてしまったお子さんも、2回のワクチン接種を受けることで十分な免疫を得ることができます。

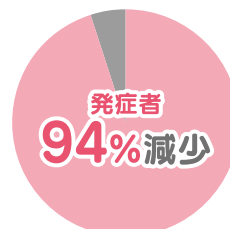
ワクチンの効果

最近の国内の調査では、1回のワクチンを接種することで水痘にかかるリスクは77%減少し、2回接種で94%水痘にかかるリスクを減らします。このように日本でも欧米のデータと同様に、極めて高いワクチンの効果が示されています。したがって、水痘にかからないためにはワクチンの1回接種では不十分で、2回接種が必要です。

1回定期接種している国



2回定期接種している国



また、ワクチン接種をすれば水痘にかかったとしても症状は軽く済み、合併症の頻度を下げることが知られています。

水痘ワクチンが定期接種化される前は、全国では毎年約100万人の患者さんが発生していると推定されていました。水痘ワクチンが定期接種化された2014年頃から水痘患者数は減少しています。

最近の傾向として、定期接種の対象年齢（1歳以上から3歳未満）から外れた年長のお子さんがかかることが増えていますので、これらのお子さんにも接種が必要です。

ワクチンの副反応

健康なお子さんに接種した場合は、ほとんど副反応はありません。免疫を抑える薬を服用されている患者さんが水痘ワクチンの接種を受けた場合、接種後14～30日に発熱を伴った丘疹（皮膚の小さな盛り上がり）、水疱が出現することがあります。

どのように感染しますか？

このウイルスは、患者さんの唾液や鼻水、水疱の中に存在し、それぞれ空気感染や飛沫感染、接触感染で感染します。



接触感染

皮膚やおもちゃなどに付いた病原体に触れて吸い込むことで感染

しかし水痘が治った後も、ウイルスは体から無くなり、神経の中に残ります。そして、高齢になったり、免疫の力が下がると、再びそのウイルスが神経に沿って発疹がでます。それを帯状疱疹（たいじょうほうしん）と言います。つまり、水痘と帯状疱疹は同じウイルスが原因でおこる病気です。帯状疱疹の患者さんとの接触でもうつります。



空気感染

空気に漂っている病原体を吸い込んで感染

飛沫感染

咳やくしゃみで飛び散った病原体を吸い込んで感染

水痘は感染力が非常に強く、集団保育などで同じ部屋にいただけで感染します。

感染しやすい時期は発疹が出る1～2日前から、発疹がかさぶたになるまでの間（7～10日）です。水痘患者さんの皮膚のすべて完全にかさぶたになるまでは感染力がありますので、幼稚園や学校へ行ってはいけません。

潜伏期間は約2週間（10～21日）ですので、水痘の患者さんは約2週間前に他の水痘患者さんあるいは帯状疱疹の患者さんと接触している可能性があります。

♥ ワクチンが接種できない人は誰ですか？



接種を受けることができない、いわゆる接種禁忌の人

- 明らかな発熱を認めた場合
- 重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな者
- ワクチンの成分によってアナフィラキシー（重いアレルギー反応）を起こしたことがある場合
- 免疫機能に異常があったり、免疫機能を抑える治療を受けている場合（免疫抑制剤など）
- 上記以外で予防接種を行うことが不適当な場合

*輸血またはガンマグロブリン製剤の投与を受けた人は、接種しても免疫が十分に獲得できないため、通常3か月以上の間隔をあけてから受けます。

*川崎病や血小板減少性紫斑病などの治療でガンマグロブリン大量療法（200mg/kg以上）を受けた場合は、6か月以上の間隔をあけます。

*女性は妊娠中の接種はできませんが、接種後も2か月間は妊娠を避ける必要があります。



接種を受けるにあたって注意が必要な人 接種前にかかりつけ医によく相談しましょう

- 心臓・血管・腎臓・肝臓・血液に持病がある人、発育に障害がある人
- これまでの予防接種で接種後2日以内に発熱や全身性発疹等のアレルギーを疑う症状を認めた人
- 過去にけいれんの既往がある人
- 過去に免疫不全の診断がなされている人
- 先天性免疫不全症の病気をもっている近親者がいる人
- 明らかに免疫機能に異常のある病気を有する人および免疫抑制をきたす治療を受けている人
- ワクチンの成分に対してアレルギー反応を起こすおそれのある人

